

# 教育長室だより

第 28 号

2021.9.13

線状降水帯という気象用語を頻繁に聞くようになり、秋の長雨が続いています。皆様のご家庭では被害はなかったでしょうか。再度お見舞いを申し上げます。

今回は、いじめのことについて考えてみます。

○

最近“バッシング社会”と言う言葉を聞くことがあります。「今の日本はバッシング社会だ」というような言い方です。これは誰かの行いや発言に対してSNSなどネット上で大勢の人が自ら名乗ることなく激しく誹謗中傷することが多くなったことを表しています。

○

発信している人の多くは自分なりの正義感から書いていることは十分想像できます。しかし、それは自分の直感的な意見であることが多く、いろいろと検証した上での結論というような重みは感じられません。むしろ、匿名をいいことに個人的な怒りや不満を発散しているだけのものもよく見られます。大勢の人から同じような誹謗が出されると、批判された人は深く傷つきます。自ら命を絶った例が発生し、国も法的な措置を執るまでに至りました。

○

このようなバッシングの問題点は、発言した人に対して反論ができないことと、感情が先立っていて情に訴える言葉なので同調する人が多く現れることです。そのときの勢いで軽い気持ちで誹謗中傷を加えてしまうのです。そこには冷静な判断や自分の意見を慎重に吟味するといった態度が見えません。自分と同じ意見が多いことに連帯感を感じ、一種の喜びを感じることもさえないのかもしれません。

○

このようにネット上の批判や誹謗中傷は、その卑怯な態度や影響の深刻さから、やはり大きな問題だろうと思います。

ふと考えるとこの構図はまさに“いじめ”そのものではないでしょうか。いじめも多数が一人に対して行うことが多く、加害者にさほどの罪の意識がないことが多いといわれています。そして被害者のダメージは深刻です。ネット上の誹謗中傷と学校で起きるいじめとはほぼ同じ構図であるということです。

いじめの加害者となった子どもに人間性の欠如というような烙印を押すことは簡単です。しかし、大人社会の中でいじめと同様のことが頻繁に行われているとすれば、子どもだけに責任を負わせるわけにはいかないと思います。

○

子どもは良くも悪くも常に“学ぶ”存在です。周囲の大人や広く世間の大人の言動を常に見聞きしています。その感情の出し方や人との関わり方を“学んで”います。その子どもたちを大人社会が断罪するだけでは改善は望めません。

○

学校では「思いやり」や「親切」などについて、道徳教育で扱う「価値」として取り上げて指導しています。この「思いやり」などは人の想像力をはたらかせなければ発揮できません。人の思いを察したり、相手の立場を理解したりするには想像力や共感する力が必要です。いまこの想像力の欠如が心ないバッシングやいじめの根底にあるのではないのでしょうか。

SNS等で人を中傷する人も、クラスメートへのいじめの加害者となる子どもも、救いようのない悪人とは限りません。意図的にやっている人以外は相手の気持ちを想像する心の余裕があればバッシングやいじめをせずにすむのではないかと思うのです。

○

子どもも大人と同じで、日々の生活の中でストレスをためることはあります。大人ほど重大ではない内容でも、子どもにとっては深刻きわまりないことになる場合があります。大人の発散の仕方を見て、子どももよく似た形で発散することがあるのではないのでしょうか。感情の出し方も大人の様子から学んでしまうのが子どもです。

○

“いじめをなくす”ための根本解決の道は、感情の出し方や発散の仕方の良い例を大人社会が子どもたちにたくさん示すことだと考えます。

周囲の大人が幸せそうに振る舞っている（他人から見て本当に幸せかどうかにかかわらず）のを見て育つ子どもは幸福です。その大人たちは日々たまるストレスもうまく発散して楽しそうに仕事をし、生活しているはずで、子どもたちもいつの間にかうまくストレスをコントロールできるようになるでしょう。

○

とても難しいことを言っていることは承知しています。自分も含めてそんなに強い人間ばかりでないことはもちろんです。しかし、元来子どもは学ぶものであること、つまり子どもは大人社会の鏡であることを時々思い出しながら子どもに接することができるだけでずいぶん違って来るだろうと思うのです。

○

正しいことが主張できない社会は悲惨ですが、一方で“正しいような気がする”程度のことを武器のように振り回すことで特定の人を傷つくとすればこれも悲惨です。

子どもに見せてもいい人間の弱さもあるでしょうけれど、できれば見せないほうがいい弱さがあるにちがいないと思います。